



全苗連だより

Vol. 7 (3月号)

平成27年3月16日

発行：全国山林種苗協同組合連合会

Tel.03-3262-3071 Fax.03-3262-3074

コンテナ苗の勘所について太田会長に聞きました

これから大幅に増加するコンテナ苗生産の参考してください

平成26年度の地区別需給調整協議会の結果を見ますと、コンテナ苗の需要量は、当年度(26年秋～27年春)が116万本、翌年度(27年秋～28年春)が166万本、翌々年度(28年秋～29年春)が256万本に大きく増加すると見込まれています。

全苗連の推計によりますと、コンテナ苗は平成20年度から導入を開始し、これまで概ね500万本(うち、300cc コンテナ苗320万本、150cc コンテナ苗180万本)を生産しておりますが、今後、更にコンテナ苗の生産拡大が強く求められている状況にあります。

コンテナ苗の育苗技術については、森林総合研究所の遠藤利明先生と山田健先生に執筆して頂き、平成22年3月に全苗連で発行した『コンテナ苗 育苗・植栽マニュアル』があり、また、このマニュアルをベースにいくつかの道府県種苗組合では、地域特性を踏まえた『生産技術マニュアル』を作成されているところもあります。

今回、コンテナ苗の導入に携わり、自らも宮城県内でコンテナ苗生産に従事し豊富な経験実績を持ち、ミスターコンテナと呼ばれている全苗連の太田会長に作業工程に沿って、その勘所を聞きましたので、紹介いたします。

【月別の作業工程】

2月 培土詰め作業、播種準備に取掛る。鳥害・獣害防止対策を万全に施す。キヒゲンは発芽障害が出る恐れがあるので使用方法を変える。

クロマツの種子を300cc コンテナに1孔1粒直播き、播種後軟らかい土か地面に置き、発芽促進養生を行う。

3月 培土の肥料濃度・高温複合障害に注意すること。ハウス内の温度がスギで30～35℃、クロマツで35～40℃を超えないようにする。

スギ・ヒノキの種子を150cc コンテナに1孔3～5粒直播きし、発芽促進養生、早く播種したものは発芽を始めるので養生の徹底に努める。

4月 クロマツ、スギ等発芽2週間後から低濃度肥料追肥を始める。月1回位の追肥を行い、生長を促す。

散水は乾いてから(コンテナを持ち上げ重量で判断する)十分に散水を行う。散水は早朝が良い。

3ヶ月に1回位有機質3要素含有肥料の追肥を試してみても。(太田会長が試したところ効果あり)

5月 ハウス内の温度をこまめに調整する。あつという間に40℃～50℃になるので、複合障害発生防止に努める。

遅霜が降りなくなったら野外育苗とするも、即育苗ベンチに上げないで、軟らかい土の上に置き、コンテナの底から根を出させ土壌に根を伸ばして早く生長させる。(いわゆる宮城方式)

殺菌殺虫剤の散布及び生長具合を見て適時追肥する。

6月 スギ等は苗高12cm位になったら第1回目の間引きを行う。1回目の間引きでは1孔1本としない。

クロマツは未発芽のものをコンテナから抜取り、24孔全部を発芽苗で埋める。未発芽床の培土をビニール袋

に詰めて土壌消毒剤を散布し、再利用に備える。

7月 スギ等苗高が15cmを超えたら、第2回目の間引きを行い、1孔1本とする。

7月～9月 苗高が30cmを超えたら、ベンチ育苗とする。山行予定苗木は遅くとも8月下旬～9月初めまでにベンチ育苗とする。これまで土の中にあった根が空気にさらされ、苗木が萎れやすいので、散水を十分に行う。ベンチへの棚上げは曇った日や午後から行い、十分散水して萎れを防止する。また、棚上げの時、コンテナとコンテナの間に4面とも空間をつくる。150ccの場合は4面とも約20cmの空間、同様に300ccの場合は約15cmの空間を設ける。これにより、根元径も太く健全な苗木となる。また、倒れる等の心配も無くなる。例えば、150ccコンテナ40孔の中ほど8孔を空孔にするより、コンテナ間の空間の方が得策です。

9月 9月中旬頃から一時コンテナから抜取り、選苗し苗高を揃え、再びコンテナへ戻して育苗する。このことにより肥培管理が行いやすくなる。

10月 寒冷地では10月下旬頃から越冬の準備を始める。コンテナをベンチから軟らかい土の上に降ろす。この時もコンテナとコンテナの間に少し空間を設ける。クロマツは12月に入ってから越冬準備とする。

12月 多雪地対策としてスギは12月初めに、クロマツはできるだけ寒くなって寒風が吹くようになってからの冬囲いとする。早くやると蒸れることがあるので要注意。越冬の準備が終わったら、根鉢に2月下旬頃までに肥料を与える。苗木は休眠中であるが、根は活動しており、溶けた肥料分は吸収され、それが弃当肥となり、根元径も太くなる。

1月 雪に埋もれていれば安心。強風の当たる場所等は防風ネット等の設置が望ましい。出荷苗規格ごと本数等確認し出荷に備える。出荷資材等の準備等

2月 新年度の生産に入る。

《特記事項》

- ※ 出荷の際液肥漬けを行う。これは植栽される山地へ肥料を施して植栽することになり、初期生長に有効です。
- ※ クロマツは発芽から9月頃まで若い葉から蒸散させながら上昇生長する。その年の気候にもよるが、9月中旬には本葉(2本の針の葉)が発生し上昇生長が止まる。その後は栄養を溜めて来年度一気に生長する。2年目からはこれを繰り返し生長していく。
- ※ ヒノキはスギより生長が遅い。梅雨明けまでハウス内育苗とし、確実にスギと同じく1年生出荷に取り組みたい。
- ※ 小低花粉のコンテナ苗の生産は、春挿し発根苗を9月にコンテナに移植、次年度の6月～7月には出荷できるような育苗方法に取り組みたい。

全苗連・苗組の行事予定

- 4月24日 平成26年度事業監査(全苗連事務局)
- 5月8日 (会場仮予約) 全苗連理事会
- 5月27日(会場仮予約) 全苗連平成27年度通常総会
- 9月8日(検討中) 全苗連生産者の集い・意見交換会(札幌市)
- 9月9日(検討中) 現地研修会(帯広管内)

